

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

問題 1. 次の文章は、福澤諭吉著『学問のすゝめ』の十三編「^{えんぼう}怨望の人間に害あるを論ず」（伊藤正雄現代語訳版）の一節です。以下を読んで、「怨望」について300字以内で解説しなさい。

問題 2. 著者が述べる“怨望の害”に当てはまる例を社会の現象の中から見出して、500字以内で説明しなさい。

およそ人間には、よくない性質がたくさんある中でも、社会に最も害のあるのは、他人の幸福をねたむ怨望の心、すなわちひがみ根性より大きなものはあるまい。そのほかにも、物欲のさかんなこと、物惜しみすること、ぜいたくをすること、人の悪口を言うことなども、皆はなほだよくない性質にはちがいない。だが、それらはよく考えてみれば、その精神の本質においては、必ずしもよくないとばかりはいえぬ。それらの精神を働かせる時と場合や、その程度のいかんや、その精神の振り向け方によって、必ずしも不徳義とはいわれぬこともある。たとえば、金^{むさぼ}を貪^{むさぼ}って、満足することを知らないのは、世にいう業^{ごう}突^とく張^{ちやう}りである。だが、金を好むのは人間の天性だから、その天性に従って、この欲望を満たそうとすること自体は、決して非難するには当たらない。ただ無理な金を得ようとして、時と場合の見境を失ったり、欲張りすぎて非道を行なったり、金を求める方向を間違えて、邪道に陥ったりした場合に、これを業突く張りの無法者というのである。金を好む人間の精神活動そのものを悪いとはいえまい。そのよいか悪いかの分かれ目は、本人の理性である。理性の範囲内で金を愛するのは、儉約とか、経済^{けいぎ}上^{じやう}手^ずとかいふべきもので、当然人間の努力すべき大切な心がけの一つといわねばならぬ。（略）

ところが、たった一つだけ、その性質自体絶対的に質^{たち}が悪くて、その時と場合にかかわらず、また発揮される方面を問わず、不善中の不善ともいふべき性格がある。それが、はじめに言った怨望である。怨望というやつは、まったく陰険な性質である。積極的に自分を善くしようと努力するのではなく、他人のありさまを見て、心ひそかに不満をいだき、自分のことは棚^{たな}にあげて、他人にのみ不当な注文を付ける。そして自分の不平を癒^いやす方法^{ほうほう}といえ、自分にプラスを加えようとつとめるのではなくて、他人にマイナスを与えて快感を味わうのである。他人の幸福と自分の不幸とを比較して、自分の方にひけ目があると、自分の境遇を改善して、幸福を増そうとはしない。かえって他人を不幸におとしいれて、その境遇をみじめにし、彼と

我との不幸のバランスを取ろうと願うといった風だ。古語に「これを悪^{にく}んでその死を欲す」〔論語〕とある通り、相手を妬^{ねた}んで死ねばよいと祈るようなものである。こういう連中の不平の虫が納まるということは、いい換えれば、世間全般の幸福が減ることを意味する。少しも世間の幸福が増すことにはならないのだ。

人によってはこういうかもしれない。「たとえば、人をだましたり、うそをついたりすることなどは、やはりそのこと自体はなほだ質のよくないことだ。これらは怨望に比べて、どちらの罪が軽いとも重いとも言えぬのではないか」と。なるほど、あるいはそう見えるかもしれないが、事の原因結果の区別からいうと、やっぱりそこに自然と罪の重い軽いがないとはいえない。人をだましたり、うそをついたりすることも、もちろんよくないにはちがいない。しかし、それは必ずしも怨望の原因ではない。多くは怨望が原因となって生ずる結果である。だから、怨望は、あらゆる悪徳の根本ともいうべきもので、世間の悪事は、そこから出発しないものはない。人の心を邪推したり、やきもちをやいたり、たえずびくびくしたり、こそこそさもしい行動をしたりするなどは、皆怨望から生まれるのだ。この性格が内攻した場合には、こそこそ話、ひそひそ話、秘密の相談、陰謀のたぐいとなり、これが外部に爆発すると、集団闘争・暗殺・一揆^{いつぎ}・内乱へと発展する。少しも国家に利益とはならず、全国一様に迷惑をこうむる点では、本人も他人もともにその被害をのがれることはできない。怨望というやつは、いわゆる社会公共の利益を犠牲にして、自分一個の私憤をはらすものといわねばならぬ。

怨望が人間社会に害を及ぼすことは、以上の通りである。しからば怨望なるものはどういう原因から生まれるかという点、それはもっぱら「窮」という一点から生ずるのである。ただしこの場合の「窮」とは、「困窮」とか「貧窮」とかいう場合の「窮」、すなわち物質の欠乏の意味ではない。それよりも、人間の言論を制限し、行動の自由を束縛するなど、人類自然の活動を窮屈にすることをいうのである。もしも貧窮や困窮が怨望の原因だとするならば、天下の貧乏人は一齊^{いつせい}に不平をととなえ、金持ちはまるで貧乏人のうらみの目標になって、社会の安全は一日も保たれぬはずだ。だが、実情は決してそんなことはない。どれほど貧乏な人間でも、自分がなぜ貧乏であるのか、その原因を明らかにして、原因が自分の責任であることを納得しさえすれば、決してむやみに他人を怨望するものではない。その証拠はわざわざあげるまでもあるまい。今日世界中に貧富・貴賤の差があるにかかわらず、よく社会の安寧^{あんねい}が保たれているのを見てもわかるであろう。そこで私に言わせれば、金があるから必ずしも人のうらみを買うわけでもなく、貧乏そのものが不平の原因となるのでもないのだ。

これらのことから考えると、怨望は貧乏が原因ではない。それではどこから生ずるかという点、ただ人類自然の精神活動が抑圧される点にある。すなわち、幸福

も不幸も、(まったく本人の自由意志によらず)、偶然の運命に支配される社会にのみ、怨望は著しくはびこるのである。昔孔子は、「女子と小人^{しょうじん}とは手におえない。実に困ったしろものじゃ」〔論語〕と嘆いたことがある。しかし私にいわせれば、実は孔子が自分の教えでその種をまいておきながら、自分でその弊害に閉口しているのだ。なんとなれば、人間の本性は、男も女もちがうわけではない。また「小人」というのは、下層の人民のことであろうが、下司^{げす}下郎^{げろう}の子に生まれた者が、生まれつき下等な人間だと神から定められたわけでもない。下郎も貴族も、生まれおちた時の性質にはなんら相違がないのは、いうまでもあるまい。しかるに、この女子と小人とに限って始末に困る、と孔子がいったのはどういうわけであるか。思うに、(古来の東洋の道徳では)、ふだんから人民全体に卑屈の精神ばかりをたたきこみ、特に無力な婦人や小人の自由を束縛して、彼らの活動に少しも自由を与えなかったため、ついに(習性となって)、怨望の気風をつくりあげることになったのだ。そこでとどのつまりは、さすがの孔子様さえさじを投げるに至ったのである。(さすればそれは、むしろ孔子を御本尊とする儒教そのものの罪ではないか)。元来人間の性質上、活動の自由を奪われれば、その結果、必ず他人を怨望するようになるのは当然だ。(以下略)

福澤諭吉著『学問のすゝめ』(伊藤正雄訳, 社会思想社, 1977), 131～136頁より抜粋。一部改変。